

前までのあらすじ

流遠るしおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゆう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思つていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘たちばなアサト、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまふ。彼等はゼヘナを危機に陥おとしれている別の敵性体——〈ブレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。

戦いの準備を整えるやみひめ達

そんな中、現地の〈機獣少女〉達の奮戦もあり、〈ブレケース〉が惑星全域で撤退を始める。だが、それと入れ替わるように新たな脅威が出現——巨大な蠍サソリの姿をしたそれは、封印されていたはずの古代種と呼ばれる機獣だった。

〈ステインガー〉と呼称が決まった古代種による被害は甚大じんだいで、しかし中央政府はその怒りを買う事を恐れているかのように積極的な対応をしない。そこで自分達の住むオオミヤ・シテイへの侵攻を防ぐため、やみひめ達は独自で行動を開始。戦力を集め、〈ステインガー〉に挑んだ。

地球から来た流遠やみひめ、彼女の友人であるクラウ・P・ブラン。

現地の〈機獣少女〉で、〈タカマガハラ〉に所属するツバキ・タカチホと、同じ事務所の先輩であり、アサトの妹かもしれないカナコ・T・シングウジ。

『二つ名』持ちで独自の権限を持つ、〈獅子王シシオウ〉アイナ・ボーグマン、〈竜帝リウウテイ〉ルイゼ・
ルンシユテッド。

〈ステインガー〉によって仲間を失った、〈F.A.:Gエンターテインメント〉所属のライカ・ユズキ、バニラ・イカルガ。

そして、目立った戦績はなく、彼女等に比べれば非凡と言わざるを得ないながらも作戦に参加した〈87プロダクション〉所属のリツとモカ。

ギリギリの戦力と役割分担により、一度は殲滅したかに見えた〈ステインガー〉だったが、それは倒したやみひめとツバキの目の前で、和装の女性の姿となって復活した。彼女は『サクヤヒメ』を名乗り、人間を滅ぼすと宣言する。

その直後、〈ステインガー〉の骸から現れた謎の少女・カグヤは、サクヤヒメの攻撃からやみひめを庇うと、彼女に力を与え、忽然と姿を消した。

一方、集結していたカナコ達の前に現れたサクヤヒメは、変異態となって敵対行動を取っていた機獣少女——キリエソウマ からMBコアらしきものを回収し、飲み込んだ。より強い威圧感を放つサクヤヒメは、瀕死に近い状態のキリエとモカを使役したが、彼女等は駆けつけたやみひめとツバキによって解放される。

戦力を維持していた仲間と共に、サクヤヒメと対峙するやみひめ達。だが、その場にカナコの姿はなかった。彼女は何も告げず戦線を離脱し、作戦が続いているヒナミ・シテイへ向かっていた、封印施設の調査メンバーの前に現れると、アサトを兄と呼び、彼を連れ姿を消す。

状況が判らないロゼット・コダールとアニスは、それを呆然と見送る。封印施設で保護し、目を覚ました直後だったアヤカ・シユバイツァーを含め。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL **XXXXXXXX**

高く澄んだ青空の下、洗い終わった洗濯物が、ひとつひとつ丁寧に干されていく。秋も終わりが近付き、空気はやや肌寒くなりつつあるが、陽射しはまだ暖かい。今日は絶好の洗濯日和だろう。

「ふふ——」

シーツやタオルをびしっと伸ばし、物干し竿にかけていく。衣服はハンガーや洗濯バサミを使い、重ならないよう等間隔に並べていく。こういう作業は嫌いではない。思わず笑みが零れてしまう程度には。

「——なにニヤニヤしてんだよ、気持ちわりー」

不意に投げかけられた子供の声に、上機嫌で洗濯物を干していた少女の手が止まった。年齢は小学校の高学年くらいだろう。左側で結った黒いセミロングのサイドポニーと、穏やかな色を湛えた蒼玉のような青い瞳をした、可愛らしい少女である。

「手伝ってくれるんですか？」

少女は暴言を気にした風もなく、微笑を浮かべて言った。相手は少女よりもいくつかな下の少年で、すぐ後ろには同年代らしい——友達だろう——少年が三人いた。

「ち、ちげーし！ 調子のんな、おっぱい！」

動じない少女に対し、少年はなんとか優位に立とうと言葉を探した。確かに、少女はその幼い容姿に反して、やたら発育が良い部位がある。それは悪い事ではないが、アンバランスであるという点では、悪口として有効かもしれない。だが——

「あら？ ケンタ君は私のおっぱいに興味があるんですか……えっちですね？」

「な……っ!?」

少女は動じないどころか、涼しい顔でくすりと笑った。大人びているのは豊富な胸元だけでなく、精神面も同様らしい。自身もまだ幼いはずの少女は、いくつかな下の少年を完全に手玉に取っていた。

「ケンタ、おっぱいが好きなのかよ！」

「えっちー！ ケンタのえっちー！」

口々に少年——ケンタというらしい——の周囲が囁し立てる。彼等は少女より、友人をからかう方が面白いと判断したようだ。子供ながらに、勝ち目がないと踏んだのかもしれない。

「うっせーよ！ 誰があんなブスのおっぱいなんか——」

「誰がブスですって?」

割って入った声に、ケンタ少年の顔色が変わった。

「げっ、姉ちゃん……!」

現れたのは小柄な少女で、同年くらいに見えるが、ケンタ少年の姉らしい。容姿は幼く可愛らしいが、彼の態度から姉弟の力関係は推して知るべしだ。

「私の友達を悪く言わないでよね。手伝わらないなら、せめて邪魔にならないように遊んでなさい」

「お、おい……行こうぜ、ケンタ」

「あ、ああ……」

す（す）ごと立ち去っていく少年達。ケンタだけでなく、友人達も彼女に対して恐れ戦いているようだ。

「ケンタの姉ちゃん、相変わらず怖えな。小せえのに」

「なんで小せえのに、あんな怖いんだよ。小せえのに」

「知らねえよ。それよか、あんまり小せえ小せえ言うな、聞こえるぞ。小せえけど」

「聞こえてるわよッ！」

本人達は声を潜めていたつもりだろうが、その声はサイドポニーの少女にも聞き取れていた。小柄な少女の大喝に、少年達は慌てて逃げだし、その姿は遠く見えなくなっていく。

「ありがとうございます。ヒノカゲさん、もしかしてガキ大将的な——」

「言わないで。若気の至りだから……」

サイドポニーの少女の言葉を、小柄な少女——スマレ・ヒノカゲは制した。頭を抱えている様子を見るに、凶星のようだ。以前に、相当やんちゃをしたのだろう。

「友達って言ってもらえるの、なんだか嬉しいですね」

「へ!?! やっ、あれは話の流れというか、言葉のアヤで、別にそんなつもりじゃ……!?!」

話題を変えようと気を遣ったつもりが、むしろスマレをテンパらせてしまったらしい。

「あ、そうですね。私達、まだそんなに親しい訳じゃありませんし、凶々しかったです

ね……」

「いや、だからって迷惑って訳じゃなくて、えっと……!?!」

しゅんとしてしまった相手に罪悪感を覚えたのか、スマレが更にテンパる。その様子がおかしくて、少女は普段の澄まし顔に表情を戻した。

「冗談ですよ。ヒノカゲさんはツンデレですね」

「……タカチホさん、意外といい性格してるわよね」

からかわれたのだと気付き、スマレはまだ付き合いの浅い友人にジトつとした視線を向けるが、当の本人——ツバキ・タカチホはどこ吹く風のようにだった。

これがサイドポニーの少女が「難攻不落」と呼ばれる所以——そのほんの一端である。

「さあ、早く済ませてしましましょう」

「……………。ええ、そうね」

涼しい顔で洗濯物を干す作業を再開する友人に嘆息し、スマイレもそれに倣った。

少し肌寒い風が吹く秋空の下、大量の洗濯物が干されていく。それをするのはツバキとスマイレだけではなく、多くは大人の女性達だ。少し遠くからは、無邪気にはしゃぐ子供達の声が聞こえる。

ゼヘナ暦二〇一六年十月二十六日。

〈ヒナミ総力戦〉における敗走から一週間が経過していた。

第三十五話

敗走

ヒナミ・シテイを決戦の場とする（ステインガー）殲滅のための作戦要綱。
通称（ヒナミ総力戦）は、今まさに混迷を極めていた。

当初の目標であった（ステインガー）の殲滅は果たしたものの、その骸が空中に浮かび上がり、弾け飛んだかと思えば、それは人の姿へと変わっていた。和装に身を包んだ、二十代半ばの女性の姿に。それは自ら『サクヤヒメ』と名乗り、機獣であった頃を彷彿とさせる攻撃手段を以て、ツバキとやみひめの前に立ちはだかった。

「っ!? 〈カグツチ〉——ッ!!」

『応!』

咄嗟の判断でツバキが相棒に指示を送る。（機獣少女とMBデバイスの間には経路が形成され、念話が可能となり、緊急時には一瞬で意思の疎通を行う事が出来る。

正面に向けて展開された半球状の防壁は、襲い掛かる超高出力のエネルギーの濁流に耐え、ツバキと、その背後にいるやみひめを護りきった。ブラスター・フォームに備わった対荷電粒子砲モードの E シールドである。

「……………っく」

だが、その負荷はシステムの想定以上だったらしく、冷却機構が全力で稼働しても排熱が追い付かない。MBジャケットが全力で機能を稼働させれば、それだけ多くの機力を消費し、それは装着者である（機獣少女）の負担へと繋がる。やみひめからの規格外な量の機力供給を以てしても、この有様なのだ。先の荷電粒子砲の威力がどれだけ異常かが窺える。

「っはは!」

「んっ!」

消耗の激しいツバキを氣遣う暇もない。やみひめは彼女を庇うように前に出て、迫る凶刃に対処する。サクヤヒメの和服の両袖から現れた、蠍のそれを思わせる巨大な鋏。（ヤタガラス）を両手で横一文字に構え、左の鋏は刀身で、右のそれは柄から発生させたエネルギーの刃——レーザー・ジュツテで、それぞれ受け止めて見せた。

互いに両手が塞がった状態だが、睨み合いにはならない。サクヤヒメは（ステインガー）であった頃のそれを想起させる尻尾を回り込ませ、先端をやみひめの顔面に向ける。先ほどの荷電粒子砲の砲身が、彼女の眉間を貫こうと迫ってくるが、それは長さを切り詰めた弓に似た形状となった（カグツチ）によって弾かれた。無論、ツバキの援護だ。これに対し、やみひめは複数の（カグツチ）——彼女が使用していた際の剣状——を空中に複製し、一斉に投擲した。だが、それらは至近距離から放たれたにも関わらず、サクヤヒメの展開した防壁に阻まれ、やがて塵状に霧散した。恐らくはツバキが展開したEシ

ールドと同質の防御手段だろう。

そんな激しい攻防が、幾度も繰り返されていた。

すでに〈ヒナミ総力戦 発動から一時間弱

本来の敵である〈カタストロ〉との戦いは、長期戦になる事はほとんどなく、常に一体に対して複数で迎え撃つという安心感もある。群れを成す〈ブレケース〉との戦いを経験していなければ、肉体的以前に精神面がまいってしまっていたかもしれない。

それでも、希望はあれど危険度の方が明らかに高い、制限時間も決まっていない戦いは、時間経過につれ多大なストレスを蓄積していく。

〈機獣少女〉であっても、当然それは変わらない。機力をエネルギーとし、機獣の核によって形成・稼働するMBジャケットを身に纏う戦乙女も、自身は普通の少女なのだから。そう——それが機獣そのものが人の姿を採った存在と、あくまで機獣の力を借りて戦う〈機獣少女〉の差なのかもしれない。

サクヤヒメの力は圧倒的だ。姿こそ巨大な機械の蠍から、か弱い女性へと変わったが、対人戦闘に最適化されたであろう今の方が、明らかに質が悪い。機獣だった際は、文字通り強大であったからこそ付け入る隙があつたものの、今やそれすらない。

「ぐう……っ」

人間には備わっていないはずの頑強な尻尾の一撃を弾き、しかし衝撃は殺しきれず、ツバキは後方へ数メートルも転がされる破目となった。やみひめが視線だけで此方の様子を窺うが、サクヤヒメの攻撃を捌くので手一杯なのは明らかだった。

「……〈カグツチ〉——」

『身体は問題ない。むしろ、怪我よりも、やみひめの機力供給による反動の方が心配だ』
〈カグツチ〉の本来の相棒はツバキだが、本調子でない彼女に代わって、やみひめと二重契約を行っていた時期がある。その際に形成された経路は未だ健在で、ツバキはそれを中継する事で、やみひめの規格外な量の機力を供給してもらっていた。でなければ、大量の機力を消耗する〈ブラスター・システム〉を維持し続ける事は出来ない。

『明日は覚悟しておけ。恐らく、全身に筋肉痛に似た症状が出るはずだ』

「それは、つらそうですね」

無論、それは『明日』があればの話だ。

「……………」

『やめてもよいのだぞ。諦めたところまで、文句を言う者などおらん……直にいなくなる』
サクヤヒメは人間を滅ぼすと言っていた。ここで自分達が負ければ、いずれ誰もいなくなる。

「……それは、気楽でいいですね」

誰かに感謝されたくて《機獣少女》になった訳ではない。『がんばったね』と褒めてもらいたかった頃もあったが、それも今は違う。

「私、またヒノカゲさんと放課後に買い食いしたいんです」

仲良くなったばかりのクラスメイトとした、初めての校則違反。

「今度は、やみひめさんも一緒にオオミヤ・シテイを案内してあげたいんです」

前回はカナコと一緒にアサトを案内したが、あの時は気がかりもあつて存分に楽しめなかった。

「やりたい事が、たくさんあるんです」

誰かのためじゃない。自分のために戦う理由がある。

だから――

『ならば――こんなところでは終われんな！』

「はい……！」

立ち上がり、半身はんみになつて両足を肩幅に開き、分グツチぶんぐつちを構え、左手で右腕を固定する。弓のような武器を、袴はかまとなつたMBジャケット姿で構える姿は、弓道ほうふつを彷彿とさせる。

機力を高圧縮した弾丸をイメージし、ツバキの意図に気付いたやみひめが離脱するのを

見計らい――

「――っふー！」

息を吐き出し、直後に撃ち出される極大の一撃。通常の三・二点射スリー・ポイントではない。牽制なく、制圧を目的とした攻撃。以前、ベアトリーチェとの模擬戦で改めて彼女の砲撃技能を見た際に、使う機会はないだろうが参考にと考えていたのである。それこそ、やみひめからの機力供給がなければ不可能な芸当だ。

「ツバキ、すごいね！」

傍らかたわに着地したやみひめが興奮気味に言った。

「いえ。やみひめさんの機力を使わせてもらっているから出来た事です。疲れたりしていませんか……？」

「全然！ 超元気だよ！」

さすがにそんな事はないはずなのだが、やみひめの笑顔を見ると、少なくともまだ無理をしているようには見えない。

しかし――

『――散開しろー！』

「うわっ!」

「く……っ!」

〈カグツチ〉の警告とほぼ同時、ツバキの放った一撃によって生まれた爆炎の向こうから、青白い光の奔流ほんりゆうが放たれた。

荷電粒子砲だ。

当然、撃ったのは――

「サクヤヒメ……!」

「多少のダメージは期待していたのですが……!」

二人の前に悠然と姿を現す和装の麗人。それは残酷なまでに無傷で、薄っすらと笑みすら浮かべている。消耗した様子は微塵みじんも感じられなかった。



サクヤヒメを相手に、やみひめとツバキが戦っている開けた駅前から、やや離れた大通りでも戦闘が継続していた。

建ち並ぶ建造物で左右を挟まれた其処そこは数の有利を活かせず、包囲される側からすれば、注意を前後のみに限定出来るでき。左右からの急襲の心配がないのは心理的に大きい。ただ、そういった利点こゝから此処を戦場ここに選んだ訳ではなく、追い詰められた結果、偶々たまたま地の利を得られたに過ぎない。そうでなければ、すでに彼女等の命運は尽きていたかもしれない。

「――つくううう!」

軍服を思わせるトップスとミニスカートを身に纏まとった娘が、力をふり絞しぼるように声を上げ、右腕の真紅のシールドから展開した一对の刃やいばで敵を挟み、力任せにぶん投げた。
〈竜帝リュウテイ〉ルイゼ・ルンシュテッドは元々、荒々しい戦い方が基本だが、持ち前の気品と優雅さで、それすらも魅力として人気を博してきた。だが、今はその余裕はなく、見るからに必死なのが伝わってくる。当然だ。今のルイゼはMBジャケットこそ維持しているが、その出力は通常の半分も出ていない。愛機であるMBデバイス〈ジービー〉のコアを、半分失うしなった結果である。

――キチキチキチキチキチキチ……。

ビルの外壁に叩き付けられ、アスファルトの大地に落下したそれが、節足と触手を蠢うごめかせる。体液を吐き出しているところを見るに、痛みを訴えているのか、あるいは昆虫と同

じで、ただの反射的な行動なのか。(カタストロ)同様、(ブレケース)について判つてい
る事はほとんどない。

「――滅せよ!」
アニヒレート

すかさずトドメの一撃が叩き込まれる。外骨格の隙間から突き入れられたレーザー・ブ
レードの粒子が、アクティブイト・ヴォイス発動言語によって機力から威力に転化し、対象を内側から破壊
する。

「……………ふう——」

ほつと^{あんど}安堵の息を吐くのはクラウ・P・ブランだった。黒いドレスをベースに、^{メカニカル}機械的
^{ウイング}な羽根や爪といった部品で構成された、^{どこ}何処ぞの事務所を思わせる意匠のMBジャケ
ットが特徴的な(機獣少女)である。不思議な縁でルイゼは、この作戦前に彼女に教導を
行った事もある。クラウは(ブレケース)との戦闘は初で、機力を流し込み過ぎると悲惨
な結果になると教えていたが、どうやらグロテスクな光景は見ずに済んだらしい。標的は
形状を維持したまま絶命している。

(ブレケース)。

それは^{かまきり}蠅螂のように^{きつりつ}屹立したカブトムシといった印象で、全高は成人男性と同じくら
いあり、節足と触手、更に^{とかげ}蜥蜴のそれに似た尻尾が生えている。部分的には見た事がある
のに、知らない生物——まるで^{キメラ}合成獣だ。

サクヤヒメが『^{ゲート}門』を開き呼び寄せた増援だが、(ブレケース)が初めて確認された時
点では、サクヤヒメはまだ(ステインガー)として封印されていたはずなので、新たに呼
び出した個体群とは無関係なのかもしれない。

「ルイゼ、大丈夫……?」

「ええ、なんとか」

こちらを気遣うクラウに、ルイゼは苦笑を返す。ほんの少し前と立場が逆転している事、
純粋に余裕がない事、そしてそれはクラウも同様である事、以上を含めた苦笑だった。

ルイゼは自分の身を護るので精一杯で、クラウもまた、^{スラスト}推進器をやられ本来の能力を^{でき}発
揮出来ていない。運動性を封じられただけとはいえ、機動力が最大の武器と言っても過言
ではないクラウにとつては、戦力半減もいいところだ。

この状況で防衛戦は厳しい。

二人の後方には、^{スピア}槍使いのリツと^{メイス}槌使いのモカ、変異態となって猛威を振るつたキ
リエが、意識を失った状態で倒れている。モカとキリエはやみひめの(分断するもの)と
呼ばれる力で解放されるまで、敵対行動を取っていた。原因は巨大なサングラスのような
^{バイザー}面を付けさせられていたため——キリエはそれ以前からだ——のようで、それが今

は外れている。だから安心とは言いきれないが、この状況ではそう信じるしかない。

ちなみにどういう訳か、敵対行動を取って以降のモカとキリエ同様、リツも瀕死の状態だったのが嘘のように全快していた。彼女等に何があったのか。

「……………」

クラウはルイゼよりやや前に出て、後続の〈プレケース〉をレーザー・ブレードの投擲とうてきで牽制しつつ、至近の個体を狙う。二人とも、動けない三人から離れすぎる訳にはいかなかったため、互いに死角をカバーしつつ、近づいてくる敵から優先して迎撃していく。防衛対象を気にしつつの戦いは、精神面への負担が大きい。

（厳しいですわね……）

サクヤヒメを倒せる様子がなく、〈プレケース〉の数は減った気がしない。終わりが見えない状況に、クラウの背中を見つめるルイゼは焦りを感じていた。

返り血で染まったような真紅の刀身が、一閃の下に〈プレケース〉の節足を斬り飛ばす。

ライカ・ユズキの愛刀〈ヘエン〉は特殊な素材で出来ており、その切れ味は光学兵器すら切り裂く。身に纏った白と淡藤色のMBジャケットでそれを振るう姿は、惑星・地球のニホンを発祥とする鎧武者そのものだ。

「よつとー！」

迫る触手を躲し、カウンターの蹴りをお見舞いする。節足を失った〈プレケース〉は別の個体を巻き込んで後方に転がり、また別の個体が進撃してくる。

「……キリがないです」

言っても詮無い事と判っていても、言わずにはいらなかったのだろう。ライカは隣に並んだ同僚の愚痴に、「そうだな」と苦笑した。

バナラ・イカルガだ。

ライカと同じ十七歳の〈機獣少女〉であり、彼女と同じく〈FA…Gエンタテインメント〉に所属している。

黒とコバルトブルーのMBジャケットは羽根や尻尾といった意匠が組み込まれ、ライカの『鎧武者』に対し、『竜騎士』といったイメージを想起させる。すでに互いに飛び道具はなく、斧槍〈ベリルランス〉も失った彼女は、実体の柄から機力で編んだ刃やいばを発生させるビーム・サーベルを両手に戦っていた。

「良いですね、カタナは機力を使わなくて」

「まあね。それでいて、こうやって機力を注いでやれば——」

ライカのカタナの刀身が、ぼんやりと紅く輝く。意外と知られていないが、カタナは斬った相手の血や油で、すぐに切れ味が鈍ってしまうという弱点がある。だが、この〈ヒエーン〉は使用者が機力を注ぐ事で、常に刀身を最適な状態に維持する事が出来るのだ。

「あんたのと交換してやろうか？」

に、と笑みを浮かべるライカ。

「結構です。あなたのように使える自信がありません！」

「お互い様だよ。あたしは二刀流が苦手だからね！」

位置を入れ替わり、互いを狙って飛びかかってきた〈プレケース〉を斬って捨てる。片や真つ二つ、片や三枚おろし。無論、体液や肉片を浴びるような愚は犯さない。

「ライカ、偶に〈スミホムラ〉も使って二刀流やりますよね？」

「いや、だから本当はやりたくないんだよね。同じような武器、二つも要らなくない？」

特性のまるで違う近接装備と飛び道具ならまだしも、同じような装備を両手持ちすると、どうしても利き手側ばかり使ってしまうのだ。

「帰ったら私が、二刀流の極意を教えますよ」

両手のビーム・サーベルをドラムスティックのようにクルクル回し、逆手にした上で腕を交差して見せるバニラ。パフォーマンスで人気のある、所謂『カッコイイやつ』だ。アイドルとしての側面を持つ〈機獣少女 界限〉において、二人が所属する〈FA・G エンタテインメント〉が変わり種の事務所と言われる所以が、その武装熱とした装備と派手な殺陣である。

「それじゃ、絶対に帰らないと——ね！」

話しながらでも常に次の標的を捉えている。互いの死角をカバーしつつ、どうすれば派手に魅せられるかを無意識に計算する。それが観客のいないショータイムだと判っているも。

（しかし、どうするかな……）

突進してきた〈プレケース〉の一体をいなし、別の個体の背中に飛び乗ったライカは、改めて戦場を見渡す。

大通りの後方では、意識を失ったリツとモカとキリエが倒れており、自分達と同じように〈プレケース〉を三人に近付けまいと、ルイゼとクラウが奮戦している。自分達にも言える事だが、MBコアの半分を失っているルイゼはもちろん、装備を破損しているクラウも、現状での長期戦は愚策だ。

かろうじて視界に入る駅前では、やみひめとツバキが戦っている。サクヤヒメ——この作戦の標的であった〈ステインガー〉らしい和装の女を相手に、規格外の力を発揮してい

るが、それでも勝てる様子がない。むしろ、徐々に押されているように見える。

（あの子達が勝てるなら、ここで踏ん張るのも意味がある。けど、そうじゃないなら撤退を考えるべきだ）

だが、撤退してどうなる？

（文字通り総力戦のつもりで来た。たった十人だが、東方大陸トップクラスの〈獅子王〉リユウテイと〈竜帝〉、タカ マガハラ〉の〈戦姫〉と〈難攻不落〉、そして確かに大型新人と云えるだけの実力を持った流速るとおやみひめとクラウ・P・ブラン、これだけの戦力を投入して駄目なら……）

まだ〈機獣少女〉は大勢いる。『二つ名』持ちの実力者だって少なくない。だが、今回以上のメンバーが集まるだろうか。〈獅子王〉は戦える状態ではないらしく、〈竜帝〉と同じく、恐らくこの戦いを以て『卒業』だろう。〈戦姫〉に至っては何も告げずに戦場を去った。

なにより敵の強さが、この作戦で証明されてしまった。生きて帰っても『次』があるかどうか。

「——なんだ……？」

静かな絶望感を抱きつつあったライカの視界——駅前の戦場に変化が生まれていた。



幾度となく繰り返される攻防を中断させたのは、撃ち込まれた一発の光弾だった。やみひめとツバキを巻き込まない位置を狙った、大玉の西瓜サイズに圧縮されたエネルギーの塊。恐らく、クラウが模擬戦で使っていた〈プラズマ・スマッシュヤー〉と同種の攻撃。だが、それを放ったのはやみひめの友人ではなかった。

「アニス？」

やみひめとツバキに背中を向けるかたちで舞い降りたのは、ロゼットの秘書であるアニスだった。何度か目にしたスーツ姿ではなく、昔話に登場する『天女』のような衣装のため、状況も相まって、それこそ羽衣を纏まとっていてもおかしくない雰囲気だ。

「……貴様、〈アニマウルペス〉か？」

突然の乱入者を警戒していたサクヤヒメだったが、すぐに相手の正体に見当がついたのか、アニスを指してそう呼んだ。対するアニスは、やや複雑な表情を一瞬浮かべただけで、否定も肯定もしなかった。

「久しいな、デステイ——」

言葉を探している様子だったアニスが、ようやく口を開いた矢先の事だった。隕石でも落下したのかと錯覚させる轟音が響き、彼女の言葉は遮られた。

サクヤヒメの右袖の内側から伸びた多関節の腕——その先の巨大な鉗が、アスファルトの地面に深く突き立っていた。放射状に裂け目が走り、とてつもない衝撃だった事は、先の轟音からも容易に想像がつく。

「その名で 妾を呼ぶな」

一切の表情を消したサクヤヒメが発した言葉は、表情と同様に一切の感情が込められていなかった。極限の怒りや憎しみの先にあるのは、ひよつとしたらこのような『無』なのかもしれないと、やみひめは漠然と感じた。

「二度は言わぬぞ」

「……そうだったな、今のは我の落ち度だ。謝罪しよう——サクヤヒメ」

アニスの真摯な態度に溜飲が下がったのか、サクヤヒメに表情が戻る。アニスが（ヒナミ総力戦）に関する説明会で言った事が本当なら、二人は古代種と呼ばれる永い時を生きた機獣。互いに面識があってもおかしくはないし、人の姿となっても、互いにそうなら受け入れられるものなのかもしれない。

「まさか、お主も人の姿となっていようとはな、（アニマウルペス）よ。やはり、この星で知的生命体が行き着く先は、この姿という事かの」

「これが進化の終着点とは限らんがな。ちなみに、今はアニスと呼ばれている」

「ほう？ 愛称というものか、なるほどの。では、妾の事は『サクヤ』と呼ぶ事を特別に許そう」

口の端を上げ、にい、と不敵な笑みを浮かべるサクヤヒメ。言葉とは裏腹に、明らかに友好的とは言い難い態度だ。

「なに、遠慮は要らぬぞ？ 妾とお主の仲じゃからの」

「我と汝が愛称で呼び合うような仲だった事は、一瞬たりともなかったがな」

ケラケラと笑うサクヤヒメとは対照的に、アニスはクールな態度を崩さない。圧倒的な温度差と、一触即発な空気が、喫茶店であれば、二人が相席しているテーブルの周囲に、誰も寄り付かないだろう。

（……あれ？）

アニスとサクヤヒメのやり取りで気付かなかったが、ツバキの姿が見えない。

（——ツバキがいないのは私の指示だ。気付かないふりをしている）

いきなりの念話。相手はアニスだ。やみひめが、ツバキがいない事に気付いたのを察したのだろう。

(場合によっては仕掛ける。タイミングを合わせる)

(わ、判った……!)

アニスに「機獣少女」のような戦闘能力があるのかは知らないが、サクヤヒメの例と、先の光弾の一撃を鑑みれば、恐らくそういう事なのだろう。

平静を装い、やみひめは緊張感漂う会話を続ける二人の動向を窺う。大通りの方では、サクヤヒメが呼び寄せた「ブレイクス」の群れを相手に、クラウ達が戦っているの見える。加勢したいが、まずはサクヤヒメをどうにかしなければ、それも叶わない。

「——ん？ あの気丈な娘が見当たらない」

「……」

会話が一段落ついたタイミングで、サクヤヒメがツバキの不在に気付いた。彼女は無言のままポーカーフェイスを崩さないアニスを一瞥し、やみひめに視線を移した。表情が強張った瞬間は見られていないはずだが、果たして今、平静を装えているかは自信がない。

「……………」

「ふん。まあよい」

ツバキの存在など気にかかるに値しない——という余裕の表れか。あるいは人間そのものに対して、その程度の関心しかないのか。

やみひめは漠然と、後者であれば悲しいと感じた。なまじ同じ姿をしていて、言葉が通じるだけに。

もつともそれは、同じ人間同士にも言える事だが。

「そうじゃ、肝心な事を確認しておらなんだ。お主は妾の敵か——アニマウルペス？」
うっかりしていたとばかりに、明日の天気でも訊ねるような気安さで、サクヤヒメは核心に触れた。「アニス」と呼ばなかったのは、現状では敵と認識していると、暗に示すためだろう。威嚇とはいえ、光弾を放ち戦闘を中断させ、こうして向かい合っているのだから当然だ。

「汝がこのまま争いを続けるというなら、それも致し方なしだ」

「此度もまた人間に肩入れするか……」

アニスの答えに、サクヤヒメは嘆息した。予想はしていたのだろう。落胆ではなく、呆れた表情を浮かべている。

『また』って言った。以前にも一人は敵対関係だったって事……?』

アニスは無表情のままだが、心なしか悲しそうにも見える。出来れば敵対したくない——そんな風に、やみひめの目には映った。誰だって戦わずに済むなら、それに越した事はない。だが、そんな一般論とは違う、相手の気持ちが判るが故の葛藤を抱えているように

見えるのだ。

(アニスとサクヤヒメは友達じゃないし、敵対もしてたけど、憎み合ってた訳じゃない…
…のかな)

二人の関係が、なんとなくだがイメージ出来てきた。

そこへ――

「――ならば死ね」

躊躇や未練など微塵も感じられないサクヤヒメの一言が、やみひめには異国の言葉か
何かに聞こえた。

(――来るぞ！)

(っ!?)

やみひめが咄嗟に動けたのは、アニスが念話で警告してくれたからだ。彼女が右に跳躍
したため、反射的に左側へ跳ぶ。結果的に左右に散って出来た花道を、青白い光の奔流
が駆け抜ける。

荷電粒子砲の光だ。

平安貴族の十二単を思わせる、ぞろっとした和服の裾から鎌首を擡げる、多関節の
尻尾の先から放たれる光線。サクヤヒメは薄っすらと笑みを浮かべ、荷電粒子の光が進路
上の何もかもを飲み込んでく様を満足そうに見つめている。もう何度もその攻撃に晒され
たため、今更その威力に驚きはしない。

しかし――

(――っ!?)

突如、やみひめを荷電粒子砲とは別の衝撃が襲った。物理的なものではない。言葉では
表現しづらい、自分という存在が強制的に世界から切り離されようとしているかのような
……。

やみひめが感じたのは、ある種の違和感のようなものだった。

胸がざわつく。

落ち着かない。

心臓が早鐘を打ち、呼吸が荒くなる。

(なに、これ……気持ち悪いよ――)

着地と同時に片膝を突き、〈ヤタガラス〉を杖にして上体を支える。

目眩。動悸。息切れ、そして嘔吐感。

「うえ……」

それらに苛さいなまれ、やみひめは少しづつ意識が遠のいていくのを感じた。

「目覚めて早々、よくよく懐かしい顔ぶれに会う日じゃの」

サクヤヒメの声だと、かろうじて判る。だが、それは誰に向けた言葉なのか。

「まさか存命だったとはな——アヤカ・シュバイツァー」

(……………誰——?)

意識を完全に失う直前、見知らぬ少女の背中が見えた。修道女シスターを思わせる黒いワンピースとベールを身に纏まとい、セミロングの黒髪をポニーテールにした、知らないはずなのに、懐かしい感じのする後ろ姿。

薄れゆく意識の中、彼女が自分を護ってくれているような気がして、それが少しだけ嬉しかった。



話は少しだけ遡さかのぼる。

密かに駅前の戦場を離脱したツバキは、念話によるアニスからの指示に従い、とある建物を目指していた。

駅前から少し離れた、しかし《機獣少女》の身体能力であれば五分もかからない距離にある教会——いや、式場だろうか。荘厳な雰囲気の内には、ステンドグラスから差し込む月明りに照らされ、一人佇たえずむ少女の姿があった。

年齢はカナコより幼く見えるが、ツバキよりは明らかに上で、恐らく中学生くらいだろう。セミロングをポニーテールにした、どちらかと言えば『可愛い』より『綺麗』といった表現が似合う、黒髪黒瞳の東方大陸美人である。

「ツバキ・タカチホさんね？」

ポニーテールの少女はツバキの姿を認めると、開口一番にそう言った。

『指定する場所にアヤカ・シュバイツァーという少女が待っているから向かってほしい』それがアニスの指示だった。

「はい。アヤカ・シュバイツァーさん、ですよね？」

ツバキが肯定こうていして訊たずねると、相手もまた肯定した。

逃げ損ねたヒナミ・シティの住民が残っている可能性はゼロではないが、彼女が目的のアヤカ・シュバイツァーで間違いないらしい。

「……………」

件のアヤカは神妙な面持ちでツバキを見つめると、真剣な表情と口調で言った。

「……………あなた、可愛いわね」

ツバキは頭を働かせ、アヤカの言葉に込められた意図を必死で理解しようとしたが、結局、この状況で何を言っているのかと相手の正気を疑わずにはいられなかった。

「ええっと、あの……貴女の指示に従うようにと、アニスさんに言われて来たのですが」この場所に行き、彼女の指示に従ってほしい——それ以上の事は何も聞いていない。なので、アヤカが話を進めてくれないと、ツバキはどうしようもない。

「ああ、あの美人さんね。彼女ともお近付きになりたいわ。キツネミミとか似合いそうじゃない？」

やはり真剣な表情と口調。どうやら本人は大真面目らしい。

「……………」

人違いである可能性を本気で考えたが、アニスの事を知っている以上、彼女がアヤカ・シュバイツァーで間違いないはずだ。

だが、それはそれで疑問が湧く。元々住んでいて逃げ損ねた訳でなければ、どうやって此処まで来た？ 《機獣少女》の可能性が頭を過つたが、MBジャケットも纏っていないければ、MBデバイスの気配も感じられない。

「ごめんなさい。そんな悠長にしていられる状況じゃなかったわね」

苦笑を浮かべ謝罪を述べると、アヤカはようやく本題を切り出した。

それはツバキの相棒であるMBデバイス——カグツチン を使わせてほしいというものだった。

「ですが、契約者でなければMBデバイスは——」

続けるはずだった言葉を、ツバキは飲み込んだ。契約者——すなわち、MBデバイスに相棒と認められなければ、《機獣少女》の力は使えない。それは小さな子供でも知っている、この惑星ゼヘナの常識だが、アヤカがそれを知らないとは思えない。それ以上に、彼女には《カグツチン》を使える確信があるのだと、表情を見て判った。

「……………《カグツチン》、構いませんか？」

『…………アヤカといったな。状況が状況だ、詮索は後にするが、私は其方を信じられる気がする』

《カグツチン》もアヤカに対し、ツバキと似たようなものを感じているようだ。

一方、そう言われたアヤカは、心なしかさびしそうな、苦笑にも似た表情を浮かべた。

『ツバキ、暫しの別れだ』

「……はい」

ふと、地球でやみひめに初めて出会った時の事を思い出す。〈カグツチ〉を預けた時も、思えばこんな気持ちになった。

胸がちくりと痛むような感覚。

家族でも友人でも恋人でもなく、そもそも人間ですらないが、〈カグツチ〉はツバキにとつてとても大事な存在なのだ、改めて感じた。

（手放さないと気付かないなんて——）

人間は失って初めて、その存在の大切さに気付く。

それはつまり、それだけ〈カグツチ〉がツバキにとって当たり前前の存在となっていた事の証明でもある。

「ちゃんと帰ってきてくださいね——〈カグツチ〉」

『無論だ、ツバキ——親愛なる我が主よ』

少し泣きそうになった。〈カグツチ〉が、自分を相棒と認めてくれているのが、改めて嬉しくて。

「アヤカさん、〈カグツチ〉をお願いします」

ツバキはMBジャケットを解除し、待機状態である黒い勾玉の姿になった〈カグツチ〉を差し出す。

「……ええ。ありがとう」

一瞬、アヤカに躊躇いが感じられた。だが、彼女は〈カグツチ〉を受け取ると、問題なく起動して見せた。黒いワンピースとベールが特徴的な、修道女のようなMBジャケットを身に纏った姿は、間違いなく〈機獣少女〉だった。



「目覚めて早々、よくよく懐かしい顔ぶれに会う日じやの」

アニスとの決裂直後、サクヤヒメの前に現れたのは旧知の人物だった。修道女を思わせる黒いワンピースとベールを身に纏った、黒いポニーテールの少女。

「まさか存命だったとはな——アヤカ・シユバイツァー」

封印される前——この姿からすれば巨大な戦闘機械獣だった頃、何度か戦った事がある。

アヤカは人間側の戦力の中核で、もっとも厄介な存在だった。

「ずっとあなたの傍で眠ってたのよ。気付かなかった？」

まさに久々の再会を懐かしむかのように、にこやかに答えるアヤカ。飄々とした態度は、以前と何も変わっていないようだ。

「合点があったわ。それならば妾が自力で封印を解けぬのも道理よ」

強固な封印システムを維持するために、人間はアヤカを動力として組み込んだのだろう。

「己は妾を封印するため、人柱にされた訳だ。散々戦った結果、その仕打ちとは」

「同情してくれるの？ なら、お願いがあるんだけど」

同情などしていない。人間とは禄でもない存在だと皮肉を言ったつもりだったのだが、

思わぬ反応が返ってきた。

「ほう？ 申してみよ」

「右の袖で口元を隠して、流し目して！」

「……………」

アヤカの期待に満ちた表情を見る限り、冗談ではないのだろう。

そうだ、こういう娘だった。

捉えどころがなく、明け透けなのに本心が見えない。

同じ姿となってもアヤカの考えが読めないという事は、なるほど、人間というのは実に思考形態が複雑らしい。

「これで満足かの？」

言われた通りの姿勢で流し目を送ってやる。ほんの気まぐれだ。

「——良い！ 黒髪和服の綺麗なお姉さんなら、やっぱりこれよね……………」

「やっておいてなんじゃが、この状況でよくそんな事が言えるの…………引くぞ」

「嗚呼っ！ ジト目も良い！ お姉様、あたし、そういうのも嫌いじゃありません！」

「誰がお姉様か…………」

アヤカが特殊なのか、それとも人間とは見目麗しい者と相対すれば、誰でもこうなるのだろうか。

(恐らく前者じゃろうな)

ツバキと名乗った気丈な娘も、共にいた同い年くらいの少女も、彼女の身代わりとなつた虚ろな少女も、アヤカのような反応は示さなかった。

「あ——そういえばなんで、そんな素敵な姿になってるの？ 随分とキャラ付けもしてるみたいだけど」

「今更か…………」

人間の常識であれば、まず最初に問うところだろう。やはり、この娘が特殊なのだ。

「以前の姿は己等と戦うのに不向きだったのでは」

答えてやる義理などない。敵との対話など無駄の極みだ。

「あとは単なるハツタリじゃよ。こういうのが最後の敵なのじゃろ？」
そのはずなのに――

(不思議じゃ。なぜ妾は、律儀に敵の話に付き合っている?)

人間の姿となった事で、思考形態にも影響を受けているのかもしれない。特に人間の女性には雑談が好きだというのが。

「へえ。古代種ってすごいのね」

同じ古代種であるアニスはともかく、人間はそれで納得出来てしまうのだろうか。アヤカはまるで疑問に感じていない様子だ。

「――ねえ、名前を訊いてもいいかな？ 永く生きてる古代種なら、本当の名前があるんじゃない？ あの無粋な名前じゃなくてさ」

「……サクヤヒメじゃ」

問われて名乗るのが初めてだからか、それとも相手がアヤカだからか、ほんの少しだけ逡巡しゆんじゆんが生まれた。

「へえ、良い名前だね。その姿だと、本当にお姫様みたいだ」

「……………」

邪気のないアヤカの言葉に、逡巡した理由が判った。

嬉しかったのだ、本当の名前を知ってもらえる事が。そんな風に浮かれた自分が恥ずかしくて、無意識に答えるのを躊躇ためらった。

「っ」

身を以て判った。

人間とは、こんなにも複雑怪奇で厄介なものか。

「嬉しいわ。まさか、こんな風にあたと話せる日が来るなんて思わなかった。ずっとあのまま、眠り続けるんだと思ってたから」

「同感じゃ。もつとも、別に嬉しくはないがの」

「それは残念。こんな綺麗なお姉さんとなら、あたしはまた一緒に眠るのも悪くないんだけどな。今度はベッドにしようよ。それとも、布団の方が良いかな？」

「ふん。冗談ではない」

人間の寝所しんじよがどのようなものかは知らないが、二度と御免ごめんだ。時折意識が浮上しては、薄暗い無音の空間で目覚める。身動きが取れず、外界の様子は判らず、すぐにまた眠りに就つく。

またそんな事を無限に繰り返すだけなど、ゾツとする。

「——ならば、一緒に暮らさない？ この世界の、この時代で、一緒に」

正直、言葉を失った。

封印されてから、どれだけの年月が流れたのかは判らないが、すでに当時のサクヤヒメとアヤカを知る者など残ってはいないだろう。(ステインガー)と呼ばれた頃の骸も、すでにない。

(妾が、サクヤヒメという名の、ただの人間として生きていく……?)

考えもしなかった選択肢。

だが、想像するまでもない。

嗚呼、それはなんと——

「……実に悍ましい——」

地の底から響いたかのような、忌々しさを隠そうともしない声音。

それがサクヤヒメの答えだった。



アニスとの決別を意味するサクヤヒメの一撃は、本人の意図せぬ結果を生んでいた。放たれた荷電粒子砲はクラウドのいる大通りが射線に入っており、半数以上の〈ブレイクス〉を消滅させたのだ。

「すごい……」

鬼神の如き力を発揮し、残った〈ブレイクス〉を次々と屠っていく増援の姿を目の当たりにし、クラウドは無意識に呟いた。

中国の民族衣装——上衣下裳を思わせる衣服の裾を翻し、アニスが戦っている。両腕に固定された、平たく砲身の長いキャノンを構え、弾速の遅い高密度ビームと、連射の効く集束ビームを使い分け、敵を近付けさせない。

無論、数が減ったとはいえ多勢に無勢は否めない。それでも〈ブレイクス〉が距離を詰められないのは、アニスが展開している防壁のためだ。一枚一枚はCDサイズの、オレンジ色に輝く八角形の板。空中に浮かぶそれらが何枚も重なる事で、敵の攻撃や接近を防ぎ、時にはぶつけて相手の氣勢を殺ぐ。

攻撃と防御を同時に行い、味方にも気を配る。まともな処理能力では到底不可能な芸当だ。

未だ意識を失ったままのリツとモカ、そしてキリエを含め、なんとか全員が難を逃れたが、すでに満足にMBジャケットを維持しているのはライカとバニラ、そしてクラウのみとなっていた。

「くっ」

アニスの防衛線をかろうじて抜けたブレケースに、クラウは手甲の爪を突き入れ、

「滅せよ！」

アニヒレイト

アクティブイト・ヴォイス

発動 言語によって、流し込んだ機力が威力に転化し、ブレケースが沈黙する。

「ベリル・ウイング」——ッ！」

余裕のない叫びが聞こえた方へと目を向けると、バニラが背中中のウイング・ユニットをミサイルのように射出していた。刃物を思わせる半透明の青い羽根が、進路上の「ブレケース」を次々と切り裂き、最後には自爆してその役目を終えた。

それを見届けると、バニラはついに限界を迎え、MBジャケットを解除した。

「おつかれさん、バニラ。後は任せな」

「すみません……」

バニラの申し訳なきような態度に苦笑しつつ、ライカはカタナをラフに構え、新たに防衛線を抜けてきた「ブレケース」に斬りかかっていく。

こうしてアニスの撃ち漏らしを残存戦力で対処しているが、恐らくそれも彼女の計算のうちなのだろう。でなければ負担が大きすぎる。

「アニスだっけ？ すごいね、あの人」

「ブレケース」の血で濡れた愛刀を振って、機力を込めて浄化する作業を行いながら、ライカが言った。その口調には憧れと畏れが同等に含まれているように感じたが、それはクラウも同様だった。「機獣少女」としては規格外だが、人間ではない、古代種と呼ばれる存在なら領ける。

「……うん。そうだね」

だが、同じ古代種でもアニスはサクヤヒメとは違う。彼女と交わした言葉は多くないが、クラウにはそう思えるのだった。

そうこうしているうちに、眼前の戦いが決しようとしていた。すでに不思議な八角形の集合体による防壁は消えており、アニスは両腕の長砲身のキヤノンも展開していなかった。そんな彼女に群がる「ブレケース」の群れは、次々に空中で細切れの肉片へと変わり、しかし体液の雨がアニスを濡らす事はなかった。

「……………」

「……見えない刃物でも使ってるみたいだ——」

何が起きているのか判らず絶句するクラウだったが、ライカの表現は的を射ていると思つた。不可視の腕を使い、不可視の刃物を振れば、確かに目の前の光景は再現出来る。あるいはピアノ線のように細く頑丈で見えにくい、ワイヤー兵器の類かもしれない。体液を浴びていないのは、先の防壁のおかげだろう。

最後の敵を肉片に変えると、アニスの尻尾の周囲に蜃気楼のように見えていた八本の光が消える。それは狐の妖怪や神使が使う『鬼火』のようであり、実体のある尻尾と合わせて九尾のようにも見えるものだった。

「大事ないか？」

何事もなかったように振り返り、アニスがクラウ達に歩み寄る。心なしか、はつとした表情を浮かべると、狐のような尻尾と、頭頂部に生えていた同じく狐のような耳が消え、よく見れば縦長となった瞳孔も元に戻った。

(あんまり見られたくないのかな……?)

ライカや他のメンバーも同じように感じたらしく、戦闘に関する事も含め、誰もアニスを質問攻めにする事はしなかった。そんな余裕がなかったとも言えるが。

「おかげさまで。正直、もう駄目かもしれないと思っていたところですよ」

一同を代表して答えたのは、すでにMBジャケットを解除していたルイゼだ。年長者といるのもあるが、この作戦の責任者であるカナコがいない今、指揮権は彼女に移譲される。ちなみに、ルイゼもない場合はアイナに移るが、彼女もこの場にいらないため、その場合はライカに移る。

「簡潔に答えてくれ。アイナ・ボーグマンはどうした」

一同を見渡し、この場にいらないはずのキリエの姿も認めているはずだが、まずはこの場にいないはずの者の消息をアニスは訊ねた。

カナコが言うには、アイナは命に別状はないらしい。だが、正確な状態と現在地までは知らされていない。そして、そのカナコは何も告げずに戦線を離脱し、その意図も行き先も不明だとルイゼは告げた。

(どうしてカナコの事は訊かないんだろう……?)

クラウの疑問を予想していたのだろう。アニスは封印施設から此処ヒナミ・シティまでの道中にカナコと接触し、すぐに姿を消したと語った。やはり意図も行き先も不明だとも。

「すぐに撤退しろ。汝等を降ろした場所にカーゴトレーラーが向かっている。直に到着するはずだ」

……………。

反対する者はいなかった。もはや満足に戦える者はなく、ルイゼとバナラは生身、リツとモカとキリエに至っては抱えていくしかない。残っても戦力どころか足手まといなのは明らかだった。

「でも、ボーグマンさんは……」

ルイゼ同様、MBジャケットを維持出来なくなったバナラが口を開くが、その言葉を最後まで告げる事は出来なかった。人道的見地から見れば搜索すべきだが、現状ではあまりに危険が大きいと判っているのだ。

「自力で動けるのであれば、アイナもあの場所に向かっては……それに、この状況で彼女を捜しになんて行けば、逆に怒らせてしまいますわ」

平静を装ってはいるが、ルイゼが忸怩たる想いなのは目に見えていて、アイナを誰よりも心配しているはずの彼女にそう言われてしまえば、もう誰も捜しにいかうとは言い出せなかった。本当は自分一人でも搜索に行きたいはずだが、今の状態では無謀すぎる。なにより、アイナが自力で同じ目的地に向かってはいる可能性は充分にあるのだ。其処は予め決めておいた、緊急時の集合場所でもあるのだから、下手をすれば行き違いになる。

「ライカ・ユズキが先導。クラウ・P・ブランは後続の直掩に付け。殿は我が務める。すぐに動けるよう準備しておく」

指示を出すと、アニスは視線を駅前へと向けた。

向こうでも戦闘は続いている。サクヤヒメが荷電粒子砲を撃った直後、見知らぬ少女が現れた。修道女を思わせる姿で、サクヤヒメと何事か話すと、すぐに戦闘になったのだ。その直前、正確には少女が現れる前くらいだろうか、クラウの目にはやみひめが気を失って倒れたように見えた。

「アニス、やみひめはどうなったの？」

駅前で起きている激闘を横目に、クラウは訊ねる。周囲への被害など、どちらも気にしていない。意識のない状態で近くに放り出されれば、二度と目を覚ます事はないどころか、墓に収めるものすら残らないだろうが、幸い、やみひめの姿は見えない。

クラウの疑問に、アニスは無言で視線を動かした。その視線の先を追うと、空間がぼんやりと歪み、件のやみひめの姿が現れた。正確に言えば、彼女を隠していた偽の景色が解除されたという表現が近いかもしれない。いわゆる光学迷彩のような。

「——やみひめ……っ!？」

底知れぬアニスの能力にも驚くべきだが、クラウはそれどころではない。親友が意識不明で倒れているのだから。MBジャケットは維持しておらず、当然、狼のような耳と

尻尾しっぽもない。この状態であの場に取り残されていたらと思うとゾツとする。

まずは保護してくれたアニスに感謝を述べるはずが――

「……………ねえ、アニス…………やみひめ、息してない…………心臓も、動いてない――」

「なんだと…………」

そこまでは把握していなかったらしく、アニスがやや動揺する。確かに呼吸をしておらず、心臓の鼓動も止まっている。だが、生気がない訳ではなく、ただ眠っているようにしか見えない。それは願望ねががそう見せているのとは違い、やみひめ個人の時間だけが止まっているような、彼女だけがこの世界の理ことわりから切り離されてしまったかのような、そんな超常的な状態だと思わせる。

「…………クラウ、よく聞け。我われにもはっきりした事は言えぬが、この娘は死んではおらん」
取り乱しそうになるのを堪え、視線はやみひめに向けたまま、クラウはアニスの言葉に耳を傾かたむける。

「まずは安全な場所に移動する。此処ここでは落ち着いて診みる事も出来ぬからな」

アニスの冷静で、それでいて優しい声音こゝろねに、少しずつ気持ちが落ち着いてくる。そうだ。やみひめは死んではない。それは自分でも確信が持てる。アニスも保証してくれた。だから、最悪の可能性は考えなくていい。

「……………うん、そうだよね」

「うむ、良い子だ。…………汝なんじは強いな」

ぽん、と頭に手を乗せられ、かけられた言葉に涙腺なみせんが緩みそうになる。アニスの優しいさは、両親や祖父母のそれとも違う、もっと大きくて根源的な何かなのかもしれない。

「アニス、ありが――」

言いかけた次の瞬間、クラウの視界が赤く染まった。

「……………え…………？」

何が起きたのか状況に思考が追いつかない。アニスが急に立ち上がり、クラウを背かばにうにして振り返った。直後、彼女の背中から見覚えのある凶器が生えた。ドラマの演出で見る血は赤いが、実際の血液というのは赤黒いのだと、妙に冷静な気持ちで目の前の光景を眺ながめていた。音が遠くに聞こえ、まるでテレビの映像を眺めているように現実感がない。アニスの背中に生えていた機械のような巨大な鋏ハサミが引き抜かれ、脱力した彼女の身体からだも反射的に抱き止める。コンプレックスではあるが、こういう時は成長の早い大きな身体も役に立つのだとぽんやり思っていると、血まみれのアニス越しに、サクヤヒメの不敵な笑

みが見えた。

「この娘はもらっておく」

そう言つてサクヤヒメは意識を失つたままのやみひめを、自ら生み出した黒い淀みのよ
うな空間に放り込んだ。やみひめの身体は冗談のように軽々と宙を舞い、おもちゃ箱に
乱暴に仕舞われる人形のように姿を消した。

「やっぱじゃ、〈アニマウル・ヘス〉……古き同胞よ」

クラウの目にはほんの一瞬、勘違いかもしれないが、アニスに別れを告げるサクヤヒメ
の表情に、幾何かの悲しみを見た気がした。



真夜中のゴーストタウンを満身創痕の少女達が進む。

見た目に重傷を負っているのは一人だけだが、それは解除したMBジャケットの恩恵に
よるもので、機力と気力の消耗度合いで言えば、全員が満身創痕と呼べるレベルに到達し
ていた。意識を失つたままの仲間を、全員で一人ずつ運びながらの移動は当然だが遅く、
先の見えない吹雪の中を進んでいるような気分になる。

その光景は敗走と呼ぶに相応しいものだった。

……………。

誰もが無言で、ただ目的地向かって進む。

それぞれが比較的、体格に近い相手を背負い、あるいは肩を貸す。先頭を進むルイゼが
キリエを、後続のクラウがアニスを、そして殿のバナラがリツを担当し、モカは途中
で合流したツバキがクラウから引き受けた。彼女はMBデバイスをアヤカという少女に渡
したらしく、戦う手段を失くしたツバキはバナラ達と同様、緊急時の集合場所を目指して
いたのだ。

修道女のような姿でサクヤヒメと戦っていた少女がアヤカらしく、なぜ他人と契約して
いるMBデバイスを使えるのか、そもそも彼女が何者なのか、判らない事だらけだが、バ
ニラの一番の懸念はこの場にはない事務所の同僚——一人あの場に残ったライカの事だっ
た。

アニスを貫き、やみひめを不可思議な手段で攫ったサクヤヒメは、彼女を追撃してきた
修道服の少女——アヤカとの戦闘を再開した。

その直前に最悪の置き土産を残して。

「……………嘘——」

そうであつてほしいという願望を込めたバナラの呟きは、しかし叶う事はなかった。サクヤヒメが発生させ、やみひめが放り込まれた、黒い淀みのような『なにか』。それは彼女がこの場を離れても消える事はなく、むしろ沼地のように広がり、すでにいるはずのない者達を呼び寄せた。

「……………」

ライカは無言。だが、その表情からバナラと同じ気持ちである事は容易に想像がつく。

一般的な〈機獣少女〉の、既存の衣装をモチーフとしたそれとは一線を画した、特徴的なMBジャケットを身に纏った少女達。兵強氣とした武器を持ち、装甲や機械といった印象の装備を身に着けた姿は、バナラとライカに通ずるものがある。

それもそのはず。淀みから現れたのはバナラとライカの同僚——街の住民を逃がすため、〈ステインガー〉の侵攻を遅らせる遅滞作戦で犠牲になった〈FA…Gエンタテインメント〉の〈機獣少女〉達だ。

遠目に見ても判る。目に光がなく、生気が感じられない。表情もなく、意志のようなものが微塵も感じられない。

あれはもう人間ではない。

「——〈竜帝〉、すぐに行つてくれ。可能な限り時間を稼ぐ」

振り返らず、眼前の『なにか』を刺激しないよう、抑えた声で言うライカ。それが最善だと判断したのだろう、ルイゼは苦々しい表情を浮かべ、撤退の指示を出した。

「バナラ、あんたもだよ。悪いが意見はなしだ」

残ると言いかねない——ライカはそれを見越してバナラを論そうとしている。恐らく戦闘になる。そうなれば、すでにMBジャケットを展開するだけの機力が残っていないバナラは足手まといにしかない。それを理解した上で、理屈より感情で、かつての仲間を止めたい、ライカを置き去りにしたくない。バナラがそういう少女だと、この親友は知っているのだ。

「……………生きて帰ると約束してください。でなければ、私も残ります」

「あいよ。心配してくれなくても、あたし一人なら適当なところで、どうとでもするさ」
最後まで振り返らず、ライカは背中ですう答えた。悲壮感などまるで感じさせない、普段の気楽な調子で。

本当に——腹が立つくらいイケメンだ。

そうしてバナラ達は戦場を離れた。ライカを一人残して。

どういった命令を受け、どういった思考で動いているのかは不明だが、かつての仲間達は逃げるバナラ達を追うよりも、ライカへの対処を優先した。

「そうですか、それでユズキさんがいないんですね……」

「うん……」

先頭の後ろを歩くツバキが、並んで進むクラウと話しているのが聞こえた。彼女は途中で合流したため、あの場を離れた経緯を知らない。同じくこの場にいないやみひめと、重傷を負っているアニスの事も、クラウから聞いただろう。

歩みは止めず、ちらと首だけで振り返る。また戦場から大して離れていない。視界には捉えられないが、ライカは戦っているはずだ。

「ライカ……」

助けに行けない無力な自分を呪いながら、バナラは親友の名を呟いた。



サクヤヒメの置き土産は五人。

いずれもライカが所属する〈F A ∴ G エンタテインメント〉——正確には、その候補生だった。実戦経験のないデビュー前だが、十分な実力と華やかさを持っており、別のブランドを立ち上げる準備も進んでいた。彼女等はその初期メンバーとなるはずだったのだ。

(たしか〈M G M デバイス〉とか、そんな名前だったかな……)

彼女等は含む〈F A ∴ G エンタテインメント〉の〈機獣少女〉は、サクヤヒメ——まだ〈ステインガー〉と呼ばれる機獣だったが——の侵攻を遅らせる遅滞作戦に参加し、ライカとバナラを除き全滅した。

(生きてるはずがないんだ)

この目で見た。彼女等の最期を。

この耳で聞いた。彼女等の断末魔を。

流遠やみひめという少女が使っていた〈分断するもの〉とかいう技が頭を過ったが、あれでは恐らく救えない。目の前の五人は死んだのだ。死んだ人間は生き返らない。

だから——終わらせてやらねばならない。

(ごめんな、連れて帰ってやれなくて)

言葉にするのは違うと思った。きっと彼女等は恨んでなどいない。これはただの、生き残ってしまった者の後ろめたさに他ならない。

「雪月花、オフエンス・モードだ」

『承知しました』

相棒パートナーの呼びかけに、武器として露出しない、MBジャケット内蔵方式のMBデバイス

〈雪月花〉が答えた。

『起動コードの入力を求めます〈此れより進むは修羅の道〉——』

「鬼おに逢あうては鬼を斬り。仏あに逢あえば仏を殺す」

ライカのMBジャケットに組み込まれている実験段階のシステム、その安全装置セーフティが解除される。ツバキのMBジャケットに組み込まれている〈プラスター・システム〉は、機力を大量消費する事で莫大な戦闘能力を装着者に与えるが、ライカが『オフエンス・モード』

と呼ぶそれは、予め貯蔵されていた機力を瞬間的に開放する。

『コード承認。〈レイジ・システム〉起動。武運を祈ります』

「あいよ……!」

〈雪月花〉の控えめな声援に応え、ライカは戦闘を開始する。なにせ時間がないのだ。

〈オフエンス・モードは百二十秒。一人につき、二十四秒しかないんだ!〉

淡藤色あわふじの装甲が、ぼんやりと紅あかく発光する。夜闇を切り裂く車両の尾灯テールランプよろしく、ライカの通過した直後に、紅い軌跡が浮かんでは消えていく。

(まず一人!)

向かってくるのは長い黒髪をポニーテールにした眼鏡めがねの少女。鎧武者ほろむすを彷彿とさせる

MBジャケットを纏まとい、大型の片刃剣を主兵装とし、ライフルによる射撃もこなせる、高い汎用性が特徴と言える。

名前はサヤ。

装備の方向性と戦闘スタイルが非常に近く、ライカはよく教えを請こわれていた。知的な印象とは対照的に人懐っこく、それでいて抜けているところが周囲からは可愛がられていた。

(あたしにしてやれるのは、これだけだ——)

ライフルの銃撃には構わず、一気に懐ふところに飛び込む。サヤの特徴は、どんな相手とも渡り合える汎用性だが、それは器用貧乏でもある。そして、タイプが近いライカが相手となれば、実力の差がそのまま結果に現れる。

ライカの愛刀〈ヒエン〉は寸分違わず、サヤの心臓を刺し貫いていた。

即座に離れ、サヤが地に伏すのを確認し、安堵あんどする。最悪、首はを撥ねる覚悟もしていたが、その必要はないらしい。

(——次!)

新たに向かってくるのは、白いショートヘアと金色の瞳の少女。それだけでも神秘的な

印象を受けるが、目尻に引かれた赤いラインと、左の頬ほおに描いかれた戦いくさ化粧けししょうが、より彼女の存在を引き立たせる。

名前はコハク。

徒手空拳としゆくけんの純粋な近接格闘タイフ型。一切の飛び道具と手持ち武器を持たないが、その爆発的な加速力がそれを必要としない。

(最初は近寄りがたいと思ってたけど、本当は世話焼きなんだよな——)

鍛えられた体幹による、威力と速さを兼ね備えた拳こぶしと蹴りが繰り出される。それらをかわし、コハクの十八番を誘う。

(来た！)

腰部の推進器スラスタから生み出される加速力と、それを制御出来るからこそ可能な突撃技。

だがそれは、彼女の特性を知り尽くしたライカには通じなかった。驚くほどあっさり突撃は躲かわされ、すれ違い様にコハクの無防備な背中にカタナが突き立てられる。

(発動するタイミングが判れば、その爆発的な加速性能故に、軸じくをずらすだけで避けるのは難しくない。もつと色々、教えてやれたのにな……)

訓練でもそうだった。だが、鍛えればそんな弱点は別の手段で補えるはずだった。彼女には、その時間がなかったのだ。

(これで二人——)

時間経過は四十秒。八秒の余裕があるが、能力向上によって身体からだは悲鳴を上げつつある。

(次はあんたか)

シヨートの金髪モノクルに片眼鏡。黒尽くめに頭巾フードと外套マント。背中には機械的な意匠を感じさせる巨大な鎌かま。幻想的な、いわゆる暗黒魔導士ダークウィザードといった容姿の「機獣少女」。

名前はイルマ。

彼女とはあまり話した事がない——というより、誰かと親しくしているのをライカは見えた事がない。だが、私生活やイルマ自身の事は知らなくても、「機獣少女」としての実力や能力は知っている。

魔法さながらの派手な攻撃は強行突破。見た目に騙だまされがちだが、あれはあくまで機力の応用で、派手な分、実は威力は低い。そして、目を引く大鎌を抜く前に、懐ふしに飛び込めば、大口径マグナムのお出迎えた。

(残念。知ってるんだよ)

背中に大鎌を背負しよった魔法使いが、接近戦で銃を抜く。初見であれば意外性で度肝どかんを抜かれただろうが、すでに知っているライカは驚く事もなく、マグナムの銃身を左手で掴つかみ上げた。その勢いそのままイルマを押し倒し、背中の大鎌を抜こうとする左手首を踏みつけ、

奪ったマグナムの薬室チャンバーに自分の機力を込め——心臓に撃ち込む。

（そのスタイルが確立されれば、間違いなく人気が出たと思うよ……）

マグナムを捨て、次の相手を見極める。

今度は高機動型。しかも、クラウ以上に飛び回るタイプだ。

いわゆる戦闘機の意匠を感じさせる、全体的にエッジの効いたパーツで構成され、もつとも特徴的なのは顔のほとんどを覆い隠すヘッドギアおほの存在だ。ただでさえアイドルとは縁遠い売り方の事務所とはいえ、これには内部の人間も驚いたという。

（その分、素顔を見せた時のインパクトはデカいけどね）

短いポニーテールにした、ゆるふわの赤毛と、大きなオレンジ色の瞳。気分屋でマイペースな性格も相まって、激しいドッグファイトをする戦闘中とのギャップがとにかく際立つ少女なのだ。

名前はウルラという。

両手持ちした大型サブマシンガンモトドを連射しつつ、高速でライカの頭上を旋回。反撃しようにも、すでに飛び道具がない。このままではジリ貧だが、空中からの狙い撃ちでは決定打にならないと判断したのか、ウルラはサブマシンガンモトドをソード形態にし、急降下してくる。さながら、地上の獲物を狙う猛禽類だ。

（あんたの弱点は、その気の短さだよ）

しかしライカは、頭上という死角から迫る相手に、緊張も恐怖も抱かない。むしろ、好機だと捉えていた。

「——てえええいッ！」

気合と共に最後の武器である〈ヒエン〉を——投擲した。

カタナが矢のように一直線に飛ぶ。高速で急降下していたウルラは咄嗟とつさに身を捻ったが、〈ヒエン〉は彼女を掠め、左のウイングスラスタかすーと本体を繋ぐ接続腕を破壊した。バランスを崩したウルラは全身の推進器スラスタを駆使して、姿勢制御と急制動を行い、地上への激突を寸前で回避する。

しかし——

「捕まえた！」

落下を逃れ、地上すれすれを飛行するウルラに取り付いている者がいた——ライカだ。減速していたとはいえ、それでも時速三百キロは軽く超えている。すれ違い様の一瞬で、しがみついたのだ。曲芸じみた身のこなしでウルラの背中に上がり、ライカはその背を踏み台よろしく、おもいきり踏み抜く。

当然、ライカは空中に跳ね、ウルラは反作用で地面に激突した。

推進力を殺しきるまで少女の身体は地面を削り、装備は砕け散り、長い長い轍を刻んだ。
からだ
わだち

(飛べるからって油断するな。一撃離脱を心がける。……もつと教えてやるべきだったね)

お手本のような着地を決めたライカは、刻まれた轍の先に想いを馳せた。終わらせてやれたのか、気は進まないが、確認をする義務がある。MBジャケットを展開していたのだから、本人確認が出来ない状態にはなっていないと思いたい。

だが、幸か不幸か、今はその時間も惜しい。まだ一人残っているのだ。

「――」
 これまでの四人同様、最後の一人も黙して語らず、ライカの前に立ちほだかった。

ライカの戦闘準備が終わるのを律儀に待ったり、わざわざ一人ずつ仕掛けてくるのは、〈FA・Gエンタテインメント〉の信条だ。彼女等はアイドルのような活動はせず、戦いで魅せる。それは本来の敵である〈カタストロ〉との戦闘でも基本、変わらない。安全面は最大限考慮した上で、効率など考えず、装備と技を駆使して興行にする。

(死んでも律儀に守ってる。偉いよ、あんた達は――)
 生前の記憶に引っ張られているだけかもしれないが、それでも。

(だからこそ、ちゃんと終わらせてやらないとね)

最後の一人が仕掛けてくる。全身鎧に近い、ほぼ全身が隠れて見えない甲冑姿は、まさに幻想世界の住人と呼べる。ウルラはまだバイザー越しに目から下が見えたが、彼女は仮面で表情が完全に隠されている。

彼女の名前はキニス。

事務所に入りたてのため、付き合いは浅く、知っている事は少ない。だが、実力はすでに充分あった。物静かで、周囲に無関心な印象があったが、〈FA・Gエンタテインメント〉を選ぶくらいなので、それもキャラ作りの一環だったのかもしれない。

(ダークな見た目の黒騎士が実は陽気だったら、それはそれで差異があつて人気になったかもしれないな)

同じファンタジー路線のイルマと組ませれば、かなり面白い事になったかもしれない。同じ鎧の剣士であるサヤと組ませれば、似て非なる部分が互いを際立たせたかもしれない。ありえたかもしれない可能性が次々と浮かんで消えていく。もうそんな未来は来ないというのに……。

「――さあ、始めようか」

軽く開いた右掌を掲げ、くいくいつと手招きする。『かかってこい』の仕草だっ

だが、正しく挑発と受け取ったらしい。手にしていた大剣を地面に突き立て、背中に懸架していたボウガン銃を捨て、片側の鏢と刃が欠けた大剣を構えた。先に地面に突き立てた大剣よりも、細いが長い。

正しい判断だろう。重い大剣では、オフエンス・モードのライカの動きは捉えられず、それでいて長い大剣なら、カタナを失った相手に対して有効範囲で優位に立てる。

（挑発には乗るが冷静さは欠かない——か）

面白い。観客が何を望んでいるか判っている。

惜しむらくは、キニスというスターの最初で最後の舞台を見届ける観客がない事だ。

そして、それは先の四人についても同じ事が言える。

だからせめて——

（あたしの記憶に刻んでやるよ……ッ！）

真紅の輝きを放つライカが一瞬で加速する。

オフエンス・モードの稼働時間は残り約二十秒。

細長の大剣を振り下ろすキニス。ライカは眼前まで迫っているが、彼女の拳が届くより、キニスの大剣がライカを切断する方が確実に早い。

オフエンス・モードの残り稼働時間——約十八秒。

ライカは文字通り、奥の手を出す。左右の手甲から発生させた光の爪——ストライク・

レーザー・クロウだ。機力で編んだ左右で六本のそれは、通常なら黄色だが、今はオフ

エンス・モードによって紅い。眼前に振り下ろされた大剣を左の爪で弾き飛ばすと、キ

ニスは腰からもう一本、左手で幅広の剣を引き抜く。だが、それも瞬時に右の爪で叩き落とす。

オフエンス・モードの残り稼働時間——約十五秒。

不利を悟って、正面を向いたまま後方にステップを踏むキニス。彼女は最初に突き立てた大剣に手を伸ばすが、当然、ライカはそれを許さない。ステップを踏んだキニスの胸部に蹴りを入れ、後方に加速する彼女を追い抜き、進路上に突き立てられていたキニスの大剣の刀身で、持ち主の背中を串刺しにした。

オフエンス・モードの残り稼働時間——約十秒。

外套で判りづらかったが、キニスの背中に装甲はなく、胸部装甲も左右で分割されているため、彼女の太剣の刃は綺麗に持ち主の胸の中心を貫いていた。

「——ふっはあ！……はあ……はあ……はあ……はあ……」

キニスの身体から大剣を抜き、倒れた彼女の痙攣が治まるのを見届け、ライカはわずかに稼働時間が残っていた（レイジ・システム）を終了させた。まだ未完成のシステムな

ため、フル装備でない状態での使用は危険を伴う。具体的には、終了直後に使用者は身動きが取れなくなってしまうのだ。少しでも早く解除すれば、それだけ負担は和らぐ。(まさか実戦で使う日が来るなんてね……けどこれは……しんどいな……)

荒い呼吸を繰り返しながら、ふと倒れたキニスに意識が向いた。無機質な仮面が脱げ、とびきりの美少女が素顔を晒している。色素の薄い長い髪を三つ編みにした、無骨な黒い甲冑姿からは想像出来ない儂げな雰囲気。

(それだけ可愛けりや、普通にアイドルだって出来ただろうに……)

もつとも、それは他の四人やバニラ、そしてライカ本人にも言える事ではあった。

どうして、こんな年端もいかない少女達が、こんな事で命を散らさねばならないのか。

「まったくさ……ええ？」

役目は果たした。バニラ達に追いつくにせよ、もう少し回復するのを待つにせよ、まずは場所を移動すべきだ。そう判断し、なんとか立ち上がった直後、ライカは自分の腹から剣が生えているのに気付いた。

オフエンス・モードの影響ですでに感覚が麻痺しているのか、じんわりと腹部に熱を感じるが、痛みはない。首だけで振り向くと、とびきりの美少女と目が合った。顔は可愛いのに、全身は無骨な黒い甲冑姿で、その手に握っている大剣の先はライカに繋がっている。

ライカを刺しているのは、終わらせたはずのキニスだった。

「「うむ……ふへえ——」

喉の奥から熱いものがこみ上げ、堪らず吐き出す。地面にぶちまけられたのは赤黒い何かで、それが何なのか理解する前にライカは支えを失い、背中から倒れた。すでに夜は更け、二つの紅い月が不気味に地上を照らしている。

「……………」

一瞬、月が四つに増えたように見えたが、それはライカを見下ろすキニスの瞳だった。光がなく、感情以前に、見えているのかすら怪しかったが、それが自分を見つめている事だけは間違いない。敵意はなく、怒りや憎しみも感じない。

「あんた達もか……」

終わらせたはずのサヤが、コハクが、イルマが、ウルラが、キニスと同じように自分を囲んで見下ろしていた。まるでライカを心配しているかのように。今際の際に立ち会ってくれているかのように。

(「ごめんな、バニラ。約束は守れそうにないよ——」)

やがて、彼女等がそれぞれに自分の得物を掲げるのを、ライカはぼんやりと、どこか非

現実的な気分で眺めていた。



修道服の少女が銃を撃ち、和服の女性が楽しげに応戦する。一度は中断したアヤカとサクヤヒメの戦いは再開し、未だ続いていた。

「……………ッ！」

「——っはは！」

黒いワンピースとベールをはためかせ、アヤカは両手の自動拳銃を左右交互に連射。サクヤヒメが距離を取れば、右手の拳銃を小銃に、左手のそれは短機関銃に変化させ、固定砲台となって狙い撃ちする。動きづらそうな長い裾にも関わらず、サクヤヒメは火線を回避しながら、和服の袖から出した鉄の装甲に内蔵された砲身を展開。

(リニアキャノン……………！)

撃った際の放電と、弾体の初速の速さから、恐らく間違いないだろう。アヤカは移動しながら両手の武器を分解・再構築し、自身をも超える長砲身のバスター・キャノンへと変える。そして、サクヤヒメの砲撃が途切れた瞬間、左足を前に、右足は後ろに引き、両手で保持したバスター・キャノンを半身で構え——撃つ。その一連の動作は一瞬で、ほぼ抜き撃ちと呼べる。

「<……………」

発射の反動の余韻を感じつつ、放物線を描きながら飛んでいく砲弾の行方を見守る。速いとは言えないが、着弾までに弾頭の効果範囲から離脱するのは容易ではない。案の定、空中で発動した弾頭の効果に、サクヤヒメは巻き込まれている。

アヤカが発射したのは特殊弾頭搭載の『P砲弾』。着弾ポイントは不可思議な色彩の半球状の空間で覆われ、その内部は超重力の崩壊現象が起き、あらゆる物質を押し潰す。理論上、効果範囲内から生還する術はない。

——そのはずだった。

「これも駄目ね……………」

超重力の牢獄が消え、すり鉢状になった地面が見えた。イベント広場か何かだった一帯はP砲弾の効果で荒れ果て、何も残らないはずが、動いているものがある。それは人間の姿をしており、ゆらりと立ち上がると、にいと口の端を上げた。

サクヤヒメだ。

(やっぱり、本来の威力が出せてない……………)

アヤカは内心で独りごち、バスター・キャノンを分解・再構築。掌てのひらに黒い勾玉まがたま——待機状態キートの〈カグツチ〉を出現させる。ツバキから借り受けたものだが、それは正確な表現ではない。彼女の本来の相棒パートナーはアヤカなのだから。

「本調子じゃないのは、私が目覚めたばかりだからかな」

『……………』

〈カグツチ〉は無言。

アヤカは責めていないし、皮肉を言っている訳でもない。それは伝わっているはずだ。

「あたしが眠っている間に、世界は随分ずいぶんと変わったみたいね。あなたも、そう？ あた

しより、今の相棒パートナーの方が良かったかな……………？」

さびしさを誤魔化ごまかすように、アヤカは苦笑を浮かべながら、自虐じぎやく的な言い方をする。

〈カグツチ〉は答えない。聞こえているはずなのに、それでも。

「ねえ、答えてよ——〈ヤミヒメ〉」

今は〈カグツチ〉と呼ばれているMBデバイスを、かつての契約者は、そう呼んだ。

ゾイカルやみひめ -結-

リュニオン 再会 は果たされ、リバイバル 再生 の準備は整った。

最後は むすび 結 のための物語——

あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第二十五話をお届け致します。

前話から、ちょうど半年ぶりとなります。お待たせした分、お楽しみいただけていれば幸いです、さて……。

特に劇的な変化がある訳ではありませんが、ここから第三部となります。「まだ続くのか」と思われるかもしれませんが、完結させるぞという決意表明のつもりで『結』むすびと付けました。最終章となりますので、もうしばらくお付き合いください。

内容についても少しだけ。

第二十一話から登場したものの、ほとんど寝てるだけの少女・アヤカが、ようやく動いてくれました。彼女はカグヤと同じく過去作のキャラで、ゾイドとしての〈ヤミヒメ〉の昔の搭乗者であり、アサトの師匠に当たります。出せて満足。

とはいえ、いわゆるシロウト所謂素人作家がやりがちな、ただの自己満足にはしませんので。

それでは謝辞を。

まずはチェックをしてくださっている紙白さんに感謝を。『アイド』の擬人化であるアニメ、『FAガール』のバナラとライカに続き、『メガミデバイス』の五名にもご出演いただきました。彼女等の活躍は続くので、第三部もよろしく願い致します。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。続きが読みたいと思っていただけの場合は、アンケートにご協力ください。コメントはなしで構いませんので。

2019 / 6 / 28 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る